

# 僕の中のぼく これまで、これから

富山大学芸術文化学部教授 安達 博文

「画家もいいなあ。」と思い始めたのは小学6年生の頃でした。友だちから「ひろふみは、絵描きになるがやろ？」と訊かれ、思わず「いや、ならん。」と答えた記憶があります。心の中では絵描きへの憧れを持ちつつも、小学校高学年ともなれば自意識が芽生えてきた頃で、女の裸を描くスケベな職業と思われていそうな絵描きになりたいと、答えることはできませんでした。

そういう経緯があったにもかかわらず、その後、中学2年生の終り頃には画家になりたい思いがいつそう強くなり、高校入学直後から美大進学へ向けてデッサンや油彩画の勉強を始めました。



\* (1) サーカス  
100号 油彩・油性地キャンバス 1970年(高2) 富山県展入選



\* (2) とやま  
20号  
油彩・油性地キャンバス  
1970年(高2)  
富山県観光美術展 第2席  
富山商工会議所賞

運良く一浪で東京芸大の油画専攻に入学でき、本格的に油彩画制作を始めましたが、当時は、ドイツの画家パウル・ヴンダーリッヒ\* (4) やオーストリアの画家カール・コーラップ\* (8) が好きで、彼らが描く形体や構図法に傾倒していました\* (3)。実際、卒業制作\* (5、6) にも彼らの影響を受けた箇所が多く見られます。



\* (3) 人体  
30号 油彩・油性地キャンバス  
1975年(学部3年次)  
駒ヶ根高原美術館蔵



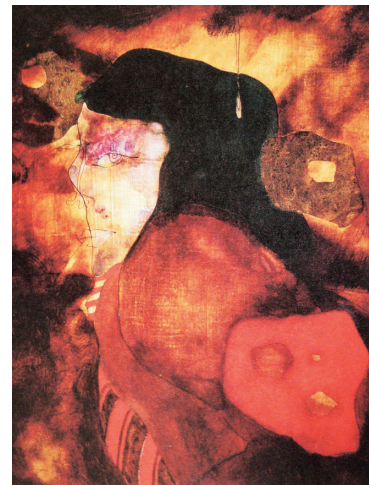
\* (4) パウル・ヴンダーリッヒ  
(ドイツ 1927ー)  
With the face towards the wall  
90×73 cm グワッシュ





\* (5) オラ  
100号 油彩・エマルジョンキャンバス  
1977年 東京芸術大学卒業制作

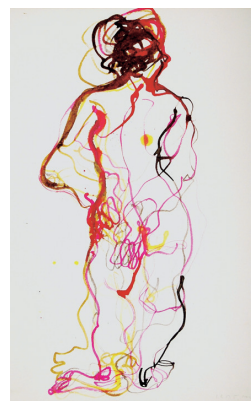
\* (7) 自画像  
10号  
油彩・白亜地/パネル  
1977年  
東京芸術大学卒業制作  
東京芸術大学蔵



\* (8) カール・コーラップ (オーストリア 1937ー)  
Stilleben mit grüner Frucht グワッシュ  
20×421×3 cm 1971年



\* (6) オラ  
100号 油彩・エマルジョンキャンバス  
1977年 東京芸術大学卒業制作 第51回国展初入選



\* (9)



\* (10)



\* (11)

\* (9~11) ドローイング  
カラーインク・葦ペン・水彩紙 1975年 (学部2年次)





\* (12) 男と女  
130号 テンペラ・油彩・白亜地キャンバス  
1979年 東京芸術大学大学院修了制作 第53回国展 国画賞



\* (13) 続男と女  
130号 テンペラ・油彩・白亜地キャンバス  
1979年 東京芸術大学大学院修了制作

時期を同じくして、画面を見ずにモデルを捉えるドローイングを3年間ほど毎日のように描いていました\* (9~11)。そして、そこで生まれる有機的な線が気に入る、何とかこれをタブローに活かさないものかと考えました。それというのも、ドローイングで使用したカラーインクは液体の描画材料であり、油彩画で使用する粘りある油性系の油絵具とは性質が真逆のため、タブローにドローイングのような描線を求めることは難しかったからです。

大学院の修了制作\* (12~13)を始めるにあたり、木炭紙大の用紙にグワッシュを用いてエスキース制作を行いました。このエスキースで得た描線、色彩、マチエールを損なわずに再現できる材料として、学部の集中講義で受けたテンペラ絵の具に着目しました。この絵の具の展色剤\* (a)は、卵黄に油脂分が分散したエマルジョンであり、水溶性です。テンペラ絵の具は、細く長い線を描くことができ、高い彩度とマットな肌合いはグワッシュと共通する点があると同時に油脂分が含まれているため、より柔軟性と堅牢性を持つという特徴があります。

またこの頃には、ひとの内面について考えるようになり、絵画表現におけるテーマとしてライフワークにしたいと思い始めました。生きている限り、ひととの関わりが避けられないのであれば、感じ得たことを素直に取り込み、作品制作に反映していこうというわけです。この思いは今でも変わらず、制作における屋台骨となっています。

元来、ひとの存在自体は重くて、どろどろとした内面を軽妙洒脱に描くには、彩度が高く艶の無い肌合いを特徴に持つテンペラ絵の具は最適なのです。

#### \* (a) テンペラメディウムの処方

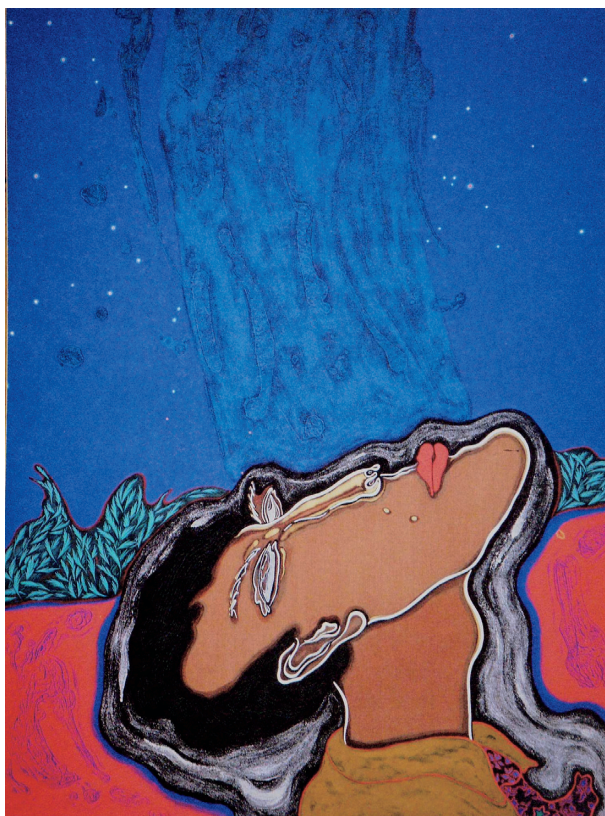
1. 鶏卵黄4~5個
  2. 生リンシードオイル200 cc
  3. 膠溶液 (100 g水 : 10 gウサギ膠—重量比)
  4. 澱粉糊500 cc水 : 100 g薄力小麦粉—重量比)
  5. 食酢45 cc
- ① 1.を攪拌しながら2.を滴下し、エマルジョンにする
  - ② 4.を糊状になるまで加熱する
  - ③ 1.~5.を混ぜ合わせて完成

テンペラ絵の具は、基本的にテンペラメディウムと同量 (体積) の顔料を練り合わせて作製します。粒径の小さい染料系、土性系、黒色系の顔料は、標準よりも多めのテンペラメディウムを必要とします。





＊(14) 浮世絵の背景  
130号 テンペラ・アクリル・膠塗リキャンバス  
1988年 第62回国展



＊(15) 星の夜Settembe  
200号 テンペラ・アクリル・膠塗リキャンバス  
1996年 駒ヶ根高原美術館蔵



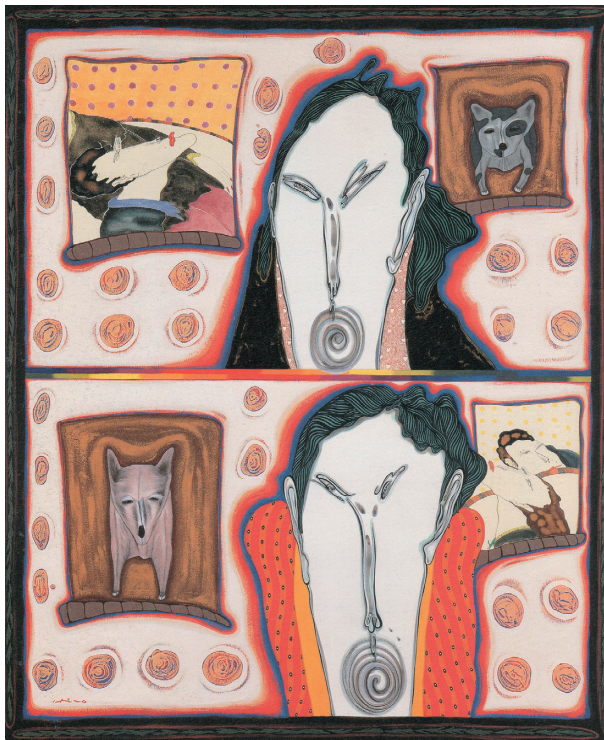
＊(16) 虹の境界ーII  
200号 テンペラ・アクリル・膠塗リキャンバス  
1995年 駒ヶ根高原美術館蔵



＊(17) 男と女と犬  
200号 テンペラ・石膏地キャンバス  
1992年 フィレンツェにて制作

人物の顔や手の部分には絵の具を載せず、地塗りが施されていない膠引きのキャンバスの織目や生地色を画面の効果として活かすことを考えていたちょうどその頃＊(14～16)、文化庁芸術家在外研修員に受かり、1991年から1992年までの1年間、イタリア・フィレンツェに滞在し研究・制作を行うことができました。留学先に持参した日本のキャンバスメーカーの膠引きキャンバスは半年余りで底を尽きました。同じ品をイタリアで求めることは叶わず、原点に戻り本来の白色下地の一つである石膏と膠による地塗り＊(b)を施し、制作を始めました＊(17)。この結果、白色下地の発色効果について再確認することができ、下地の白色は、絵の具層の発色を高め、生き活きとした色彩をもたらしました。研修を終えて帰国後、しばらくはキャンバスの生地を活かした作画を行っていましたが、次第に胡粉による白色下地＊(c)が中心となり、現在に至っています＊(17)～(21)。





\* (18) 虹の境界-IV  
150号 テンペラ・アクリル・水彩・キャンバス  
1996年 第40回安井賞展 特別賞 池田20世紀美術館蔵



\* (19) WANGUN-女と男  
150号 テンペラ・アクリル・岩彩・白亜地パネル  
2010年 駒ヶ根高原美術館蔵



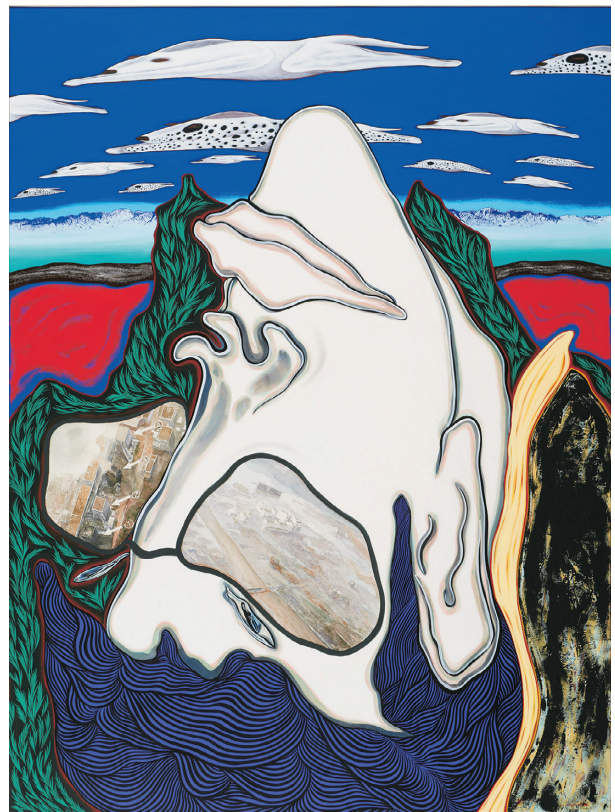
\* (20) 時の符-IV  
200号 テンペラ・アクリル・岩彩・水彩・白亜地パネル  
2008年 第82回国展 駒ヶ根高原美術館蔵

白色下地塗料の処方

- \* (b) ボローニャ石膏-2容量(体積) 又は
- \* (c) 胡粉(又は重質炭酸カルシウム) -2容量(体積)
  - ・ 膠溶液(10水: 膠1 重量比) -1容量(体積)
  - ・ 水-1.5容量(体積)

ひとの内面世界を永くテーマにしてきましたが、画面に犬や猫をよく描き入れています。飼っている猫たちそのものを描くこともあります、擬人化をさせていることが多くあります。そのきっかけは、さかのぼること25年前のイタリア留学時、フィレンツェ旧市街を散策していると、犬の散歩風景によく出会いました。制作のためのエスキースを行います、構想する中、浮かんでくるのは街で見かけた犬たちです。彼らを画面に登場させると、友人、知人と重なってきたのです。また尻尾の表情のひとつで様々な感情を表すことができ、制作上のモチーフとして面白いと思ったのです。もちろん、不細工な犬は自分です。

更に近年は、1年間を振り返り、記録として留めて置きたい社会の出来事を画面の一部に取り込むようになりましたが、重く暗い出来事が目立ちます。



\* (21) 時の符-XI  
200号 テンペラ・アクリル・岩彩・水彩白亜地パネル  
2012年 第86回国展 駒ヶ根高原美術館蔵





作品名 : 時の符-X I  
 寸法 : 200号  
 素材 : テンペラ・アクリル・岩彩・水彩・白亜地パネル  
 制作年 : 2017年  
 発表場所 : 第91回国展

眼鏡の左上は豊洲魚市場問題、右上は地震による熊本城の崩壊。同左下は米国議会議事堂、右下は北朝鮮の核実験に対する米艦船からのトマホーク発射演習を描いたものです。これらは2016年4月から2017年3月の間に

起きた出来事です。自身にとって忘れてはならない事柄として描き入れました。指と指を結ぶ三角形の糸は緊迫する世界情勢とそのバランスを意図しています。



## 《絵日記》



絵日記は、床置きで制作をしています。気になる出来事が無い日は、学内の廊下で屍となった昆虫を描いたりもします。日頃は、物を観て描くことが少ないので、写生する楽しさや新たな発見をすることもあります。



絵日記の展示風景 2016年 6月 安達博文展 日本橋高島屋美術画廊にて



絵日記の展示風景  
2016年 6月 安達博文展 日本橋高島屋美術画廊にて

縦1.13m×横9.15mのロール水彩紙に、その日の出来事を絵日記として描いています。1ロールで約6ヶ月分です。少しずつ巻き込みながら、1メートル単位の画面で描いていますから、その都度は、描いている周辺だけしか見えず、さほど変化を感じません。ロール紙を初めて会場で拡げ、離れて観て分かることは、永いスパンの中での心の変化が形や色彩となって現われ、もはや隠すことのできない自分自身に気づかされるということです。

高岡短期大学から学部まで含めて30年余りの勤務の中で、多くの学生や同僚との出会いと別れがありました。自由や不自由なこと、他分野の仕事や考え方を知ることができ、とても勉強になりました。



# 【地域活動の記録】

1994年 9月 高岡都市美観賞選考委員会委員（高岡市主催）

1995年12月 日本年賀状版画コンクール北陸地方審査員（北陸郵政局主催、～2000年10月）（金沢市）

1995年12月 伏木富山港海岸自然環境保全型海岸整備モデル事業調査委員会委員

1996年 8月 国民文化祭とやま‘96「創作ファッションショー」審査員（文化庁・富山県他主催）

1997年10月 中学・高校生デザインカップ審査員（臼井学園主催、～2001年10月）

1998年10月 魚津市市展主任審査員（魚津市教育委員会主催）

1998年 省エネルギーポスターコンクール審査員（財・省エネルギーセンター主催、～2004年）

2004年 日本美術家連盟北陸地区代表委員（～現在）

2004年 5月 新市市章選考委員会委員長（砺波市・庄川町合併協議会主催）

2004年 富山市民文化事業団評議委員（～2011年）

2005年 9月 黒部市美術館デッサン講座講師

2005年12月 高岡市美術館ワークショップ「子供VS安達」講師

2006年 7月 鹿児島市立美術館油絵講座講師（鹿児島県）

2006年 8月 とやま自遊館文化教養セミナー第2回「美感悠創のすすめ」女性専科講座「顔でつづる日記」講師

2006年11月 越中アートフェスタ審査員（2007年まで）

2007年 3月 富山市ファミリーパーク自然体験館壁画制作監修

2007年 4月 黒部市美術館運営諮問委員会委員（～現在）

2007年 4月 安達博文・野田雄一とやま自遊館10周年記念対談（とやま自遊館主催／富山サンフォルテ）

2007年 9月 黒部市美術館デッサン基礎講座講師

2007年 7月 宮日サムホール大賞展審査員（宮崎県）

2007年 8月 講談社フェーマススクールズアートコンテスト特別審査員（安達博文賞授与）（2017年まで）

2007年 9月 黒部市美術館デッサン&油彩画制作講座講師（～2010年）

2007年10月 朝日町展主任審査員（～2011年）

2008年 7月 宮日3号大賞展審査員（～2010年まで）（宮崎県）

2008年 9月 2008『絵で伝えよう！わたしの町のたからもの』絵画展—富山ユネスコ協会主催—審査員

2008年10月 おおしま手づくり絵本コンクール2008審査委員長（～現在）

2008年10月 富山市展版画部門審査員（～2009年）

2009年 7月 宮日4号大賞展審査員（宮崎県）

2009年 9月 黒部市美術館デッサン&油彩画制作講座講師

2009年 9月 山・川・海ワンダーランド実行委員会委員長（黒部市）

2010年 8月 朝日町小中教育研究協議会講演「絵描き雑感」—朝日町役場

2011年 1月 とやま賞選考委員会委員（～現在）

2011年 5月 魚津市美術文化協議会 第34回総会講演

2011年10月 黒部市美術館制作講座講師

2012年10月 「とやまっ子夢の家」絵画コンクール審査委員長

2014年 9月 黒部市美術館デッサン制作講座講師（～現在）

2016年11月 越中アートフェスタ審査員（～現在）



## 【研究活動歴】

1952年富山県朝日町生まれ／1970年第25回富山県美術展入選（～1971）；富山県観光美術展出品-富山商工会議所賞受賞／1976年不忍画廊個展（東京）／1977年東京芸術大学卒業；第51回 国展入選（東京都美術館他、以後毎回出品）；富山県民会館ギャラリー個展（富山）／1979年東京芸術大学大学院修了；第53回国展国画賞受賞；第1回 杜萌会展出品（日本橋高島屋・大阪高島屋／'05まで）／1981年文化庁芸術家国内研修員／1988年第5回伊藤廉記念賞展伊藤廉記念賞受賞／1989年第32回 安井賞展出品（セゾン美術館他、東京、'91 '92 '94 '95 '96 '97）；1991年文化庁派遣芸術家在外研修員（イタリア '92まで）／1993年富山大和個展（富山大和催事場、北日本新聞社主催、富山）／1994年ガレリア・イル・ポンテ個展（イタリア・フィレンツェ）；安達博文展（朝日町立ふるさと美術館、富山）－美術館主催／1995年平成7年度「とやま賞」受賞（財・富山県未来財団）／1996年個展「安達博文展」（日本橋高島屋・大阪高島屋 '03）／1997年第40回 安井賞展特別賞受賞／1998年「DOMANI・明日」展（安田火災東郷青児美術館）；日本現代作家作品展（上海美術館、中国）／1999年安達博文の世界展－僕の中のぼく－（池田20世紀美術館）／アート最前線25年作家とともに（池田20世紀美術館）／2001年第1回みちの会出品（大阪高島屋、名古屋高島屋 以後 '02、'03、'04、'05）／2002年文化庁在研制度35周年記念「DOMANI・明日」展2002（安田火災東郷青児美術館）／2003年人を描く展Ⅱ（神田日勝記念館、北海道）／2004年にんげん・いろいろ50の世界（池田20世紀美術館）；安達博文展 現代の写楽か－安達の眼－（財・駒ヶ根高原美術館）／2006年国画会80周年記念展（財・メナード美術館）／2007年第1回個の地平展（日本橋高島屋）、以降毎回出品；文化庁芸術家在外研修制度40周年記念 旅展（国立新美術館）／2008年東京コンテンツポラリーアートフェア2008（東京美術倶楽部－彩鳳堂画廊ブース）／2010年 伝統からの創造・21世紀展（～2015年）；安達博文展（日本橋高島屋、ジェイアール名古屋タカシマヤ）／2011年 安達博文展（大阪高島屋）／北海道現代具象展招待出品（北海道立近代美術館、他）／2012年 Domani・明日展文化庁芸術家在外研修45周年記念特別展示招待出品（国立新美術館）；公募団体ベストセレクション美術 2012（東京都美術館）；安達博文展（画廊憩ひ、佐賀/2013、2014、2015、2016）／2016年安達博文展（大阪高島屋／日本橋高島屋）；第10回「北海道現代具象展」記念展（北海道立近代美術館）／2017年文化庁芸術家在外研修制度50周年記念展（日本橋高島屋、他）／【現在】国画会会務委員、日本美術家連盟

北陸地区代表委員

## 【パブリックコレクション】

朝日町立ふるさと美術館（富山）／朝日町立あさひ野小学校中庭壁画制作（富山）／（財）池田20世紀美術館（静岡）／金沢美術工芸大学資料館（石川）／（財）駒ヶ根高原美術館（長野）／黒部市美術館（富山）／佐久市立近代美術館（長野）／女子美術大学アートミュージアム（神奈川）／白木谷国際現代美術館（高知）／鈴鹿かまぼこ博物館（神奈川）／高岡市万葉歴史館（富山）／東京芸術大学（東京）／富山県立高岡西高校（富山）／富山県立富山いずみ高校（富山）／富山県立泊高校（富山）／富山県立富山高校（富山）／富山県美術館（富山）／財団法人富山勤労総合福祉センターとやま自遊館（富山）／富山市（富山）／富山市民プールのステンドグラス（富山）／富山市体育館（富山）／富山ヤナセ（富山）／入善町民会館（富山）、森記念秋水美術館（富山）、他

## 【主な関係図書及び著書等】

人類初の月面着陸（共著・主婦の友社刊）-挿絵担当 1979年／画集エロス（共著・大日本絵画刊）1983年／現代デッサンの技法（単著・アトリエ出版社刊）1983年／月刊アトリエ5月号・鎌倉取材（単著・アトリエ出版社刊）1986年／受験美術コース油絵科（監修及び共著・講談社ラーニング刊）1987年／群像・日本の作家-志賀直哉（小学館刊）1991年-カット担当／安達博文作品集（共著・太陽アート企画）1993年／作品集 HIROFUMI ADACHI DIPINTI 1986-1994（単著・EDIZIONI “IL PONTE” FIRENZE）1994年／NHK衛星放送「BS美術館」に第71回国展出品作「煙草のけむり」が放映される。1994年／安達博文展図録（共著・朝日町立ふるさと美術館）1994年／フジテレビ「テレビ美術館」に第70回国展出品作「虹の境界-VI」が放映される。1996年／安達博文個展図録（単著・日本橋高島屋）1996年／越中万葉夢幻たんポスター原画制作（単著・高岡市民文化振興事業団）1996年／フジテレビ「テレビ美術館」に第71回国展出品作「虹の境界-VIII」が放映される。1997年／MADO美術の窓技法講座前編（単著・生活の友社刊）1998年8月号／MADO美術の窓技法講座中編（単著・生活の友社刊）1998年9月号／MADO美術の窓技法講座後編（単著・生活の友社刊）1998年10月号／安達博文展図録（単著・太陽画廊刊）1999年／作品集 安達博文の世界－僕の中のぼく－（単著・財・池田20世紀美術館刊）1999年12月／新日曜美術館アートシーンにて安達博文展－僕の中のぼく－が紹介される。2000年2月／絵は風景（A氏想う）が掲載（読売新聞社論説委員 芥川喜好評論－読売新聞日曜版）2000年1月23日付け朝刊／美の世界「安達博文－顔で



つづる日記」が放映される。(日本テレビ制作) 2000年  
8月18日／遙かなる望郷のバラード チプリアン・ポル  
ムベスク正伝表紙画担当(竹内祥子著、ショパン社刊)  
2001年／現代の絵画VOL.8(共著・朝日アーティスト  
出版) 2002年5月／現代の絵画VOL.9(共著・朝日アー  
ティスト出版) 2003年6月／日本当代油画芸術(共著・  
嶺南美術出版社刊—中華人民共和国) 2003年7月／現  
代の絵画VOL.10(共著・朝日アーティスト出版) 2004  
年7月／NHK新日曜美術館アートシーンにて安達博文  
展(駒ヶ根高原美術館主催)が紹介される。2005年7  
月／萩野卓司詩選集 青い雪 装丁及び表紙、挿絵(桂書  
房刊) 2006年9月／とやま自遊館10周年記念スカーフ  
原画制作 2007年4月／とやま自遊館扇子原画制作 2009  
年7月／現代の洋画24(共著・マリア書房刊) 2012年  
7月10日／歌集 若葉の風 畠山拓郎著 表紙画担当(幻  
戯書房刊) 2013年3月27日／現代の洋画25(共著・マ  
リア書房刊) 2013年7月10日／いい芝居いい役者 藤井  
英介著 特装本 挿絵担当(三月書房刊) 2013年9月／月  
刊フェーマス 特集 安達博文 平面の饗宴—線と面が出会  
うとき(講談社フェーマススクールズ刊) 2014年12  
月27日／現代美術アーティストファイルP.64、P.65(共  
著・株式会社ART BOXインターナショナル刊) 2015年  
5月12日／安達博文展図録(共著、日本橋高島屋刊)  
2016年6月／月刊フェーマス10・11月号 特集 安達博  
文の世界 現代を写楽する(講談社フェーマススクール  
ズ刊) 2016年9月1日